



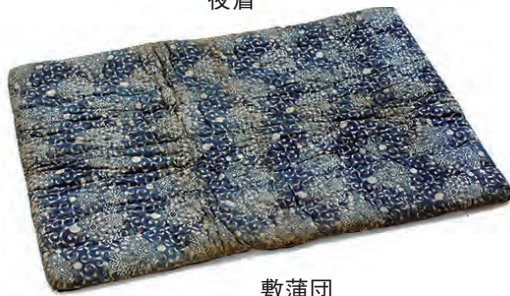
夜着



敷蒲団に夜着を掛けたもの



恵比寿と大黒天の絵
絵の上の回文は『なかきよの
とおのねふりのみなめさめな
みのりふねのおとのよきかな』



敷蒲団



撥枕

塚枕

船底枕(上6点)



括枕(上3点)



蕎麦殻入枕



竹枕



籐枕



抱籠

寄贈資料の中から

寝具

今回は、資料の中から寝具を紹介します。

資料の敷蒲団や夜着には厚く綿入れされていますが、木綿綿の普及は江戸時代中期からで、大変高価なものでした。夜着は着物の姿をした掛蒲団で、平安時代には衿や袖がついた直垂衾や宿直物といった寝具が用いられています。夜着は肩口を塞ぐため保温性が高いという利点があり、寒い地域での使用が多くみられます。

枕は、菅、い草など植物を編んだもの、木を加工したものなど、古くから様々なものが使用されています。

括枕は布袋に蕎麦殻や粃殻などを詰め、両端を括った円筒形の枕です。木製の枕では角型のものや丸太を切ったもの、板を指し合わせた箱枕などがあります。

江戸時代には結髪が盛んとなり髪形が大型化していき、髪形を崩さない枕が必要とされました。そこで撥枕や塚枕といった、幅が狭く高さのある枕がつけられました。これらは木枕に小型の括枕を取り付けたもので、敷蒲団から外して置き、首筋にあてて用います。

また、括枕には紙や布をあてたり巻いたりしておき、枕が汚れないようにします。

撥枕は木をくりぬいた形が三味線の撥のようにみえる枕です。塚枕と船底枕は箱枕の一種です。塚枕は台形をしており、塚に似ていることからこの名で呼ばれます。船底枕も台形ですが、枕の底に反りがあるのが特徴で、寝返りが打ちやすいといわれます。

竹枕や籐枕は夏に使われます。どちらも熱を逃がすために、空洞をつくることで風通しをよくしています。

抱籠は竹を円筒形に編んだ大型の抱き枕で、夏の夜に涼しく寝るためのものです。

恵比寿と大黒天の絵は初夢をみる際のまじないに使われるものです。江戸時代には吉夢をみるため、正月二日に宝船や七福神などの版画を買い求め、枕の下に敷いて寝るという風習がありました。絵の上にかかれていのは回文の和歌で、回文とは上下どちらからでも同じように読めるもののことをいいます。

職人昔語り

車大工 佐藤 柳太郎さん

車をつくる～鍛冶～

前号では木工のお話でしたが、運搬用の車は木で作られた部分ばかりではなく、鉄で作られた部分もあります。今号は鉄の部品を作る鍛冶の作業のお話です。

鍛冶は親方である父を中心として行う作業で、熱した鉄を金槌で叩いて目的の形に形づくっていく。弟子たちや柳太郎さんも手伝いとして向鎚を振るう。向鎚とは8ポンド(約3.6kg)から12ポンド(約5.4kg)の大きな金槌である。父が3ポンド(約1.35kg)の金槌で鉄を叩くことで手伝いに向鎚で叩く場所を指示する。そのため、親方と手伝いは交互に鉄を叩いていくことになる。鍛冶を行っている間は口を利かないので、父の金槌の叩き方から向鎚で強く叩くのか弱く叩くのかを感じ取らなければならない。父が金槌で軽くトントンと2回打つとこれで終了という意味があった。

第二次世界大戦中でも鍛冶の材料となる鉄は入手しやすかった。車屋で使う鉄は寸法が決まっており、車でしか使い道がないため、車用の鉄が鋼材屋に入荷すれば、向こう側から声を掛けてきた。しかし、第二次世界大戦直後になると、鉄が出回らなくなり、鋼のような硬い鉄でも質には目をつぶって買ったこともある。硬い鉄だとなかなか曲がらず、また、鍛接することも難しいため、非常に苦勞をした。根方の方の農家が海軍工廠から払下げてもらった良質の鉄を持っていたため、それを持ちこんでもらって鍛冶を行ったこともある。

左右の車輪を繋ぐシンボウ(心棒)と呼ぶ車軸は鍛冶で製造する。シンボウは車の大きさによって太さが決まっている。鋼材屋で売っている鉄は角棒なので、シンボウとして使うためには角を丸くする必要がある。旋盤を使えば早い時間で正確な丸いシンボウを作ることができるが、金槌で叩いて丸くした方が丈夫になるため、旋盤は使わなかった。角棒である鉄を丸くするためには、まず、熱した鉄の角に向鎚で叩いてある程度丸くする。次に半円筒形の溝のあいた金床に鉄を置き、その上から金床と同じ半円筒形の溝のあいた金槌のような道具を当て、その上から向鎚で叩いて丸棒状に成型していく。最後は鑢で削って仕上げを行っていた。向鎚を振るう手伝いが二人で叩いても、1本を仕上げるためには2時間ぐらいを要した。

木工で作った車輪の周りには、鍛冶で製造したワガネ(輪金)をはめる。ワガネは車の大きさに応じて厚みと幅が決まっている。第二次世界大戦後に作られたバリキ(荷積馬車)のワガネが一番大きくゴブニスン(厚み5分=約15mm、幅2寸=約60mm)で、ウシ

グルマ(荷積牛車)のワガネはヨンプスニ(厚み4分=約12mm、幅1寸2分=約36mm)であった。鉄はそれぞれの厚みと幅の長い平鉄なので車輪の円周に合わせた長さに切らなければならない。平鉄の上で車輪を1回転させたところが車輪の円周となるので、そこにロウ石で線を引く。輪にして繋げた時に少し縮むので、その分を見越してその線から平鉄の厚みぐらいの長さを足して切る。繋ぐ部分に鉄の接着材である鉄ロウを挟み、コークスを入れたホド(火床)に入れる。ハナ(火花)が上がると溶けたという証なので、ホドから取り出して向鎚で叩いて鍛接していく。

新しく作ったワガネや修理したワガネがある程度数のなってくると、ワガネを車輪にはめていくヤキバメという作業を行う。ワガネを窯のようなところへ入れ、全体を赤く熱して少し緩ませてから車輪にはめていく。車輪は木でできているため、熱したワガネをはめていく時にぐずぐずしていると燃えてきてしまう。はまりにくい時は少し金槌で叩きながらはめていく。水槽の中に入れて車輪を回しながら金槌で叩いてずれていないか確認をし、これで完成となると車輪全体を水槽の中に浸ける。冷やすことで熱して緩んだ鉄を締めつけていき、車輪からワガネがずれないようにする。ヤキバメの作業は車屋としての腕の見せ所であった。

ワガネをはめた車輪を荷台に通したシンボウに取り付けると完成である。完成した車には防腐剤である柿渋を塗っていた。沼津周辺のどこの車屋でも柿渋を塗っており、新しい車は赤茶色をしていた。しかし、柿渋だけだとその色にむらが出たり、すぐには柿渋の鮮やかな赤茶色にならないことから、柳太郎さんの車屋では蒲色(橙色)のカバコ(蒲粉)を柿渋に混ぜて塗っていた。

父は鍛冶の親方として、その技術を柳太郎さんに引き継ぐことはしなかった。そのうち、車の依頼が無くなり、鍛冶の技術が活かされることが無くなってしまった。



(話: 佐藤 柳太郎氏 昭和5年生まれ 沼津市幸町在住)

一年間にわたり、貴重な車大工のお話を聞かせて頂いた佐藤柳太郎さんに、この場を借りてお礼申し上げます。

三浦点描① おか べ なが かげ 岡部長景と東瀛荘 1 とうえい そう

現在、伊豆三津シーパラダイスの正門前の広場や右手の駐車場の建物となっているところには、かつては、発端丈の北麓から続く小高い尾根が内浦湾に向って延びて、二又の東の岬となり、その東裾に松濤館が位置していた。昭和30年代には、三津から長浜に向って狭く短い旧富士見隧道を抜けると二又の入江で、直ぐに右下に降りる道があり、それを下ると三津天然水族館の玄関前ロータリーになっていた。入江を塞いだ天然のプールではイルカのショーが行われていた。

大正6年に竣工したといわれる旧富士見隧道が掘られていた尾根は、三津と長浜の境界でもあり、凝灰岩の岩山で、稜線近くに大きな魚見の松がそびえ立ち、三津側の斜面には別荘が建てられていた。

この別荘は、駿河国志太郡岡部を出身地とする近世大名で、明治維新まで和泉岸和田藩主であった岡部一族の最後の藩主の子で、貴族院議員、東條英機内閣で文部大臣も勤めた岡部長景の別荘「東瀛荘」であった。

このことについては、既に山本三朗さんの「岡部長景翁と東瀛荘」(『沼津史談』32・昭和57)に紹介され、『三津の覚書』(昭和51)にも関連した気多神社奉納書画帖や山桜植樹の碑などが紹介されている。

今回、『岡部長景日記』(尚友倶楽部編・1993・柏書房)に別荘取得に関する記述があることを知った。昭和3年10月から同6年2月までの記録しか残されていないが、ちょうど別荘の入手の時期のものであり、詳しい経緯がわかるので紹介したい。

「岡部長景翁と東瀛荘」に載せられている、昭和21年に書かれた長景の「子孫への語り草」の中にも少し触れられているが、この別荘は、岡部長景が新設したのではなく、元は高田商会の高田釜吉(あるいはその養父高田慎蔵)が建てたものである。日記には、高田商会の清算人との交渉について記されている。

昭和4年1月24日の条「…三津の高田釜吉私有地の件は三菱銀行の丸山氏(精算委員の一人)に一万二千円を申し入れ置きたり。丁度勸業銀行の評価と符号したる由、何れ本月末委員会ある筈なれば相談の筈。」

同年3月23日の条「…高田商会所有沼津三津の地所を一万五千円にて譲受くることに内相談をなして去り、再び登庁。」

同年4月24日の条「午後一時宋倉氏来省。三津の土地譲渡契約案を持参されたるにつき、三通に調印して渡す。」

これらの記述によれば、この日記以前から破産した高田釜吉の経営する高田商会の清算委員会(三菱銀行など)に譲渡を申し入れ、1万5千円で、昭和4年4月に購入したことがわかる。

高田商会は、明治14年に、ドイツ人経営の兵器商



昭和30年代の松濤館(相磯進氏提供)(白い新館後方に東瀛荘の屋根、上に右幹に小屋がけのある魚見の松が写る。)

社ベア商会を継承した佐渡出身の高田慎蔵を名義人とし、邦人商社として設立され、明治27年の日清戦争で巨額の利益を上げた。その後、総合商社として発展を遂げ、三井、大倉と並ぶまでになったが、大正12年の関東大震災で本社屋が倒壊する被害を受け、さらに為替で損害を受け、大正14年に経営破綻した。その時点では、大正8年に慎蔵の引退を受け、婿養子の釜吉が商社を継いでいた。釜吉は、「天下の糸平」と自称した実業家田中平八(幼名藤島釜吉)の3男である。

前述の「子孫への語り草」には、別荘入手までの経緯についても記されており、伊豆半島を巡って別荘の適地を探していたが、富士の眺望と交通の便から内浦を選び、中でも長浜城山と三津久伏・二又の二箇所を候補地としたが、城山は多くの地主がいるのに対し、久伏は先に別荘地として買収され、破産した会社の清算委員である四大銀行の担保となっており、処分に困っていることを確認でき、全区域4千坪を一括して譲り受けることが出来たとされる。

同年5月26日の条に「…十時半に沼津に着し、自動車で三津に赴いた。天は晴れ渡って居るが富士山丈は雲に包まれて姿を見せない。松濤館にて小憩の後地所検分に出掛け、建物も見た。何分多年放置してあったので戸障子から台所等は随分損じて居り、相当手入を要する様である。それから舟の置場乗場等につきて調べたが、結局南側即長浜向の方がよさそうである。それで一先づ松濤館に戻りて、空腹に新鮮な魚で中食をやりて海岸を礼讃した。…」とあり、長年放置されていた建物が残されていたことが明らかである。

高田釜吉が始めてこの地に別荘を構えたのか、それは何時なのか、どういう経緯なのかなどについては、今のところ判断できる資料はない。釜吉なら高田商会を継いだ以降に取得した可能性が高い。三津坂隧道は、明治30年に完成し、駿豆鉄道の長岡駅は明治31年に開業、松濤館の開業は明治44年とされており、三津が保養地となる環境は既に整っていた。

魚見のある風景⑫ 重寺淡島

右の写真は、内浦重寺の秋山太郎さんから提供していただいた伊豆内浦紫明堂発行の絵葉書の写真です。

『小海前ヶ崎』とありますが、手前は小海の前ヶ浜と呼ばれたところで、潮がずいぶん引いているように見えます。先端に大きな岩が露出しているところが、前ヶ崎と呼ばれる岬です。重寺ではゲンギョッ鼻、ウィラ崎などとも呼ばれたようです。

今では右側の崖の岩は削られ、手前の磯浜は埋め立てられて県道が通っています。この岬が重寺と小海の境界に当たり、岬の先端から左手の淡島の裾にある獅子岩に向って、海を仕切る、塞ぎ網という網が張られていました。海流に乗って南下してくる魚群はこの網を通ることが出来ませんでした。岬の裏側は島合洞と呼ばれる入り江で建切網の漁場でした。

中央奥の海面に漁船が写っており、附島周りのようです。その左手の斜面に林の中に、櫓が小さく写っています。拡大すると中央上方のようになります。4本柱の二層の櫓のようです。



淡島の頂上に鎮座する淡島神社と対岸の白山神社には、それぞれ明治33年と大正2年に奉納された漁場絵馬があり、それによればこの近くには附島との間を捕り込み場とする舳のアンドがあり、その指示をするための魚見があったことが分ります。現在も淡島水族館の裏に櫓を立てるための平場を作った石積みが残されています。ただ、写真の櫓の位置はかなり高所にあり、今残されている石積みの平場に建っていたものではないかもしれません。

資料館からのお知らせ

歴史講座を開催しました

1月30日に本年度の歴史講座を市立図書館視聴覚ホールで開催しました。

内容は、「徳川家康の沼津支配～松井忠次を通じて～」です。家康四男於次丸（後の忠吉）の後見として河東二郡の郡代、三枚橋城代となった忠次について、柴裕之さんに最新の研究成果を話して頂きました。170人の皆さんの聴講をいただきました。

松井忠次は、一般には松平康親として知られていますが、実は確実な資料ではそのように名乗ったことはなく、子の康重が家康から一字を拝領したことが、間違って伝えられたのではないかと、駿遠国境の諏訪原城防衛に功績があったことから、駿豆国境の守衛も任されたのではないかなど興味あるお話がありました。



出前講座のようすの紹介



資料館では、学校の授業のお手伝いもしています。静浦小中一貫校での昔の道具についての出前講座の様子です。昔の民具の紹介と火起こし体験を行いました。舞錐による火起こしは難しく、苦戦しました。

沼津市歴史民俗資料館だより

2016.3.25 発行 Vol.40 No.4（通巻209号）
編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1
沼津御用邸記念公園内
沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266
FAX 055-934-2436
URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>
E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp